

「間にある都市」の超克に向けたネオ田園都市論の構想

—都市計画学、農村計画学、人文地理学の対話から—

杉山 武志・太田 尚孝・三宅 康成
社会環境部門

Conception of a Neo-Garden City Theory for the Surmounts of “Cities Without Cities” —A Discussion about Cooperation of City Planning, Rural Planning and Human Geography—

Takeshi SUGIYAMA, Naotaka OTA, Yasunari MIYAKE

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract: This study explores potential ways of overcoming difficulties that are inherent in “cities without cities,” a phenomenon observed by Thomas Sieverts in extensive urban and rural areas, with a primary focus on examining garden cities, to which he also paid special attention. The findings suggest that, in order to structurally and critically understand the current status of garden cities in Japan, where “regional revitalization” has been promoted, it will be necessary to pursue development of a “neo-garden city theory” that can lead to regional designing and solutions to policy issues with regard to “cities without cities.”

Keywords: Cities Without Cities, Garden City, Neo-Garden City, Nishiwaki City

1. はじめに

1.1. 研究の背景と目的

「間にある都市 (英: Cities Without Cities、独: Zwischenstadt)」という概念がある。「間にある都市」とは、ドイツ人のトマス・ジーバーツ (Thomas Sieverts) による比較的新しい都市への見方である。「間にある都市」は、世界の人口の半分が住むことになる、合理的判断に基づき生成されてきた「特徴がなく名前の付けようもない空間」とされている (ジーバーツ 2017, p.17)。ジーバーツの都市論は、日本においても『「間にある都市」の思想』として邦訳、紹介されている¹⁾。日本の学術界において、「間にある都市」へのアプローチは、佐々木 (2006)、久保 (2007)、村山 (2012)、蓑原 (2013) があるが、ジーバーツが期待するような論争が起こり、

「間にある都市」を克服する有効な手立てが論じられているとは、それほどいえない状況でもある。

『「間にある都市」の思想』は、都市計画学だけでなく、他の学問分野との対話を促すものとなっている (ジーバーツ 2017)。なおかつ書名の通り、理念的な要素も多分に含み、難解でもある。しかし、日本の状況に照らし合わせながら多様な学問分野が対話を行い、「間にある都市」についての研究を前進させていくことが求められているのではないだろうか。わが国で生じている、より利便性や機会を求める大都市都心部への人口回帰と、これとは逆ベクトルのローカリズムを重視する中山間地域への移住・定住促進との二極化がみられるなかで、その中間地点が表象された「間にある都市」が、考察の空白地帯となってしまうことは避ける必要がある。特に、「間に

ある都市」をめぐる関心が寄せられている、「田園都市」(ジーバーツ 2017, p.7)をいかに持続可能な発展に導くかについては、日本においても喫緊の課題となるテーマと考えられる。そうしたなか本研究の目的は、やや難解な「間にある都市」の発想を、ジーバーツの専門分野である都市計画学と、隣接する農村計画学および人文地理学との対話のなかから解きほぐす端緒を示すことにある。特に、「田園都市」と呼ばれてきた空間に対して、都市、農村、コミュニティの相互関係を論じるなかから「間にある都市」という困難を克服するための展望を示すものとした。

ここで、本研究の重要な鍵概念となる「田園都市」について、後述するものの、若干だが確認しておきたい。「田園都市」というと、英国人のエベネザー・ハワードを思い浮かべる読者が多だろう。20世紀以降の都市・地域論においてハワードの「田園都市(英: Garden city)」(ハワード 2016)は影響力をもってきた概念の一つといえる。ジーバーツ自身も田園都市の問題を検討するにあたり、ハワードの考えに触れている(ジーバーツ 2017, p.7)。ハワードの「田園都市」は都市、農村、コミュニティの相互関係のあり方を含み、現在でも「理想都市」とされる。実際に国内外で数多くの田園都市的空間の創造が計画、実現されてきた(西山 2002; 日端 2008; 大島 2010)。しかし、これから詳しく検討を進めていくが、「田園都市」はハワードの専売特許ではない。事実、日本とドイツには、賛否はあろうが、ハワードとは異なるもう一つの田園都市論がそれぞれ存在してきた(内務省地方局有志 1980; 村上 2000; 祖田 2016)。「田園都市がニュータウンへいたる系譜のなかに位置づけられた」(西山 2002, p.7)なか、全ての田園都市を包括しうるものとしてハワードの理念を捉えるには限界がある。

そのようななか、本研究の独自性は、次の点となる。すなわち、ハワードの「田園都市」のみに依拠するのではなく、日本とドイツにおいて議論が重ねられてきた、もう一つの田園都市論も含めて省察的に批評していくことが、「間にある都市」を超越する第一歩になりうるとの提起にある。そのためにも本研究は、もう一つの田園都市論の考え方や概念を振り返ったうえで、ケーススタディから「間にある都市」の実情と克服に向けた論点の把握を試みる。「地方創生」「地域創生」が掲げられる現代日本の田園都市の現状を構造的・批判的に理解するためにも、わが国が抱える「間にある都市」の政策課題への処方箋と地域デザインの道を切り開きうる“新しい田園都市(=ネオ田園都市)”論の構想の意義を、大胆ながら示唆してみるものとした。

1.2. 本研究の構成と方法

本研究の構成は以下の通りである。まず第 2 章では、本研究の軸となるジーバーツの「間にある都市」を概説したうえで、その指向、問題提起を確認し、取り組むべき課題と解決策を導き出すための道筋を示す。第 3 章では、第 2 章での解決策を講じるために、いくつかの田園都市論への振り返りを試みる。特に本研究では、課題を抱えながらも日本とドイツで進められてきたもう一つの田園都市論の再発見を促したい。第 4 章では、誌面の関係で総花的になるが、ケーススタディとして兵庫県西脇市を事例に、日本における「間にある都市」に対峙していくための知見の獲得を目指す一端を示す。最後に第 5 章では、「間にある都市」を超越するための“新しい田園都市”を構想する意義について示唆したい。

研究の方法は、文献調査、西脇市の公表資料および提供を受けた資料の分析、観察調査と聞き取り結果に基づく。2016年4月以降、筆者たちによる西脇市での継続的な調査のなかで蓄積してきた内容に基づいて論じている。第 4 章のケーススタディについては、西脇市都市経営部次世代創生課からの許可のもと記述している。

2. 「間にある都市」の憂鬱

2.1. トマス・ジーバーツの略歴

まずは、ジーバーツの略歴に触れるなかから彼の関心にアプローチしてみることにしたい。日本においてもジーバーツの著作が翻訳されているものの、彼の主張を踏まえたうえでの学術論文の成果が我が国においてまだまだ少ないことから、少し丁寧に紹介してみたい。

ジーバーツは、アカデミックの世界での教育・研究と、建築家・都市計画家としての実践者という両面を有するクロスオーバー型人材である。ジーバーツは、1934年にハンブルクで生まれ、1955年から1963年の間にシュトゥットガルト工科大学やリバプール大学、ベルリンで建築とアーバンデザインを学んだ。その後、1965年までベルリン工科大学にて Fritz Eggeling 教授の学術アシスタントとして従事し、1966年に Kossak と Zimmermann と共同で Freie Planungsgruppe Berlin を設立した。1967年から、国内外の様々な大学(ベルリン芸術大学、ハーバード大学、ノッティンガム大学)で教授・客員教授として活躍し、1971年から1999年まではダルムシュタット工科大学にて「アーバンデザイン及び住宅地整備」講座の教授であった。その間、1978年にはボンにアーバンデザイン・住宅建設・自治体コンサルティングを担う自前の計画事務所を開設している。2000年には「S.K.A.T. Architekten + Stadtplaner」と改名し、2006年以降は

同事務所の顧問を務めている。また、1989年から1994年の間は、IBA エムシャーパークのディレクターとして、Karl Ganser と共に国際建築展のプログラム及びプロジェクト開発を担った。1995年から1996年には、Wissenschaftskolleg zu Berlin のフェローとなり、そこで Zwischenstadt (以下、定義等に触れる箇所以外では邦訳書に従い「間にある都市」と表記) の概念を構想している (Vicenzotti2017, p.128)。

次に、もう少し詳しく、ジーバーツの関心を確認してみよう。『「間にある都市」の思想』を記す以前のジーバーツの研究関心は、ケヴィン・リンチの「Image of City」に依拠していたという。児童生徒や学生におけるメンタルマップの研究では、記憶イメージの調査も行っている。そのなかで1960年代末にはベルリンにて、「建築家なしの無秩序状態の建築」を見つけ出し、政治的な意味づけを行う研究を進めている。1970年代の末には、アーバンデザインとの密接なカテゴリーの一つとして、「時間」概念へのアプローチを展開する (Sieverts2004, p.45)。「イメージ」や「時間」への考え方は、彼の学問的アイデンティティとして脈々と受け継がれているものであり、『「間にある都市」の思想』においても、比較的多くのページ数を割いて論じられている (ジーバーツ 2017)。

1980年代には、都市エコロジーに関する研究が発見され、ベルリン学派によって「都市的自然 StadtNatur」が新しい概念として根拠づけられた。これにより、ジーバーツの考えに、都市化された田園地域への視野が芽生えはじめた。そして、比較的短期間のうちにジーバーツは、Christian Holl のエッセイに感化されるなかから、「間にある都市」をその誕生史という視点で考察しはじめている。つまり、成長する自立性と都市の部分的なシステムの差異化への視点、同時に進化論的に人々の居住形態を説明するという視点であった (Sieverts2004, p.45)。

「トマス・ジーバーツの名前と「間にある都市」の概念は1997年に刊行された書籍以降、分けられることはない」 (Vicenzotti 2017, p.127) と評されるほど、『「間にある都市」の思想』はジーバーツの代表的著作として燦々と輝きを放っている。『「間にある都市」の思想』の目的では、グローバリゼーションと交通、通信技術の革新、産業構造やライフスタイルが大きく変化するなかで「古典的な社会像、空間像に基づく空間構造の認識の枠組み」が「現代の広域生活圏を捉えきれなくなっている」とする懸案が記されている。そうした懸案が示されるに至った原因を明らかにしたうえで、解決に導くために今までとは全く違った広域空間イメージの表現が目指され

た。すなわち、「間にある都市」という実態への認識である。ジーバーツは、自らの専門である空間デザインから新しい広域計画、地区の計画の可能性を引き出したいと語っている (ジーバーツ・蓑原 2006, p.6)。

ここで、ジーバーツのいう「間にある都市」の定義を確認しておきたい。Zwischenstadt という言葉は、今日の都市が「間にある」状態のなかにあることとされる。

「場所と世界の間、空間と時間の間、都市と田園」の間にあることを意味する。つまり、都市と田園の空間が1つに溶け込んで「都市田園連続体」になってしまっているような都市地域のことを指す (ジーバーツ 2017, p.7)。

「間にある都市」は、歴史的に形成されてきたコンパクトなヨーロッパの都市が溶解し、それとはまったく違う新しい形になってしまい、「今や、世界中に広がっている現象」という (ジーバーツ・蓑原 2006, p.6)。

ジーバーツによる『「間にある都市」の思想』は、英語版、フランス語版、スペイン語版、日本語版もあり、ドイツ語圏に限定されていない。しかしながら、英語圏の研究者によって、ジーバーツは比較的ほとんど受容されず、仮に受容があったとしても表面的ともされている (Vicenzotti2017, p.137)。これは、英語圏だけでなく、日本においても同じような傾向が見受けられる。邦訳の2版が出版されているにもかかわらず、「間にある都市」へのアプローチが日本の学術論文においてもそれほど多くなされていないのである。

筆者らが『「間にある都市」の思想』を読む限りだが、これは、ジーバーツ・蓑原 (2006, p.10) の次の呼びかけへの戸惑いがあるのかもしれない。すなわち、「怒りや情熱を抑えた啓蒙的な分析の書というよりは、論争を引き起こし、行動への挑戦を訴える」ことの難しさであろう。上述の Vicenzotti (2017, pp.127-128) も述べているが、「建築家・都市デザイナーであるジーバーツは間にある都市」により、ヨーロッパの都市、第一義的にはドイツの都市デザイン及び計画論に関する言説 (そしてそのなかでの支配的な理想) の分析と批判を行っている。確かに『「間にある都市」の思想』では、都市計画家や都市デザイナーに関心が向けられている。他方で、「場所と世界との間、空間と時間との間、都市と農村との間」と繰り返らされているように、むしろ経済的・政治的・社会的なつながりや、都市や田園の発展の文化的諸条件といった、従来の都市計画学に少ない論点が示されている。要は、『「間にある都市」の思想』において、都市計画学と他の学問分野との対話が促されている。

無論、学問分野を越えた論争は大事だが、垣根をこえて相互理解を促していくことは、時に困難なプロセスも

経ることとなる。こうした論争への理解が難しさを助長してしまい、日本での「間にある都市」へのアプローチの足かせとなっている可能性は想定されてよい。「間にある都市」という憂鬱を解消し、ジーバーツが訴えたい真意への理解を進めていくことが、日本において「間にある都市」論を活発化させていく第一歩となる。

2.2. 「広域都市圏」と「システム」「アゴラ」の葛藤

本節では、ジーバーツが『「間にある都市」の思想』で訴えている2つの核心的な指向を検討するなかから、異分野間の対話が必要となってきた理由を示してみることとしたい。結論から示しておく、2つの指向とは、(1) 広域都市圏、(2) 「システム」と「アゴラ」をめぐる議論となる。

前節で確認したように、「都市田園連続体」とされる「間にある都市」は、「比較的広いエリアをカバーし、都市と田舎の双方の性格を持つ」と位置づけられている(ジーバーツ 2017, p.19)。「現代の広域都市圏」といわれる「間にある都市」(ジーバーツ 2017, p.8)では、政治的、社会的、文化的領域において、異なった所得とライフスタイルの階層により構成される利己的で競争主義的な都市の断片化が発生し、危機的な解体へと突き進んでいる(ジーバーツ・蓑原 2006, pp.85-88)。だからこそジーバーツは、「空間デザインに焦点を当てることによって、新しい広域計画、地区の計画の可能性を引き出すこと」(ジーバーツ 2017, p.8)を『「間にある都市」の思想』の目的の一つとして、期待を寄せて提案したのであろう。もちろん、ジーバーツの広域計画の構想を日本に適用するにあたっては慎重な議論を要するだろうが、いずれにせよ、広域都市圏のあり方にジーバーツの関心の根幹がある。

ジーバーツの広域都市圏への見方は概ね、次のようなものである。すなわち、広域都市圏は、多かれ少なかれ均質で連続的な生活地域に成長しつつあり、ひとつの全体性を持った広域都市圏の住民であるという意識が、社会の変化に伴い重みを増しつつあるという。このように変質した社会・経済的な状況のなかで生活に花を開かせるためには、アイデンティティを強め、生活の支援がある「場」との新たな関係を持つことが要求される(ジーバーツ・蓑原 2006, pp.85-88)。一方で「古い伝統的な計画のための道具立ての利用に制限を加える必要」を提案していることにも留意する必要がある。とりわけ「従来、無縁だと考えられていた分野にまで計画の対象を広げなければならなくなる」との強調がなされていることに特徴があろう(ジーバーツ・蓑原 2006, pp.163)。

ジーバーツの主張のおもしろさは、計画コンセプトの必要性を訴えながらも、「より人間的な「間にある都市」の発展にとって決定的に重要なものは、人と人との関係、人と都市の文化的特質との関係、そして人と自然空間との関係」を重視する点にある(ジーバーツ・蓑原 2006, p.167)。これは、「間にある都市」が「個々の合理的行動の結果」(ジーバーツ 2017, p.21)として現出してきた状況への省察的なメッセージといえる。事実、原著第3版の「あとがき」には、学生、建築家やプランナーなどの実務家が、プランニングの委託組織やその関係者が自らの都合よく理想化することへの内省が促されている(ジーバーツ 2017, p.195)。その内省にあたってジーバーツが特段に重視した、ある種の哲学的な見方が、「間にある都市」の核心としての「システム」と「アゴラ」をめぐる問題であろう(ジーバーツ・蓑原 2006)。

ジーバーツによると、「システム」と「アゴラ」を次のように位置づけている。すなわち、生産、社会・文化的サービスの供与、それに消費に関する合理的な「システム」、フェイス・トゥ・フェイスの出会い、現実の知覚的体験、そして直接的関与のための生活空間として認識される「アゴラ」である。「システム」は、グローバリゼーションのなかにある合理的な生産と消費、世界的な分業等による人間生活とは無縁の断片化した時空間とされる。他方の「アゴラ」は、相互関係を持つ無数の個別領域で構成され、自助と近隣連帯意識に基づく社会のセーフティ・ネットと位置づけられる(ジーバーツ 2017, p.89)。ジーバーツは、この2点が本来、都市地域空間のなかで親密なつながりを持つ必要があるにもかかわらず、現実的には分離・分極化傾向にあると警鐘を鳴らす。

こうした警鐘を論じるにあたって『「間にある都市」の思想』では、スウェーデンの地理学者であるギュンナー・テルクヴィストと、フランスの社会学者であるアラン・トゥレーヌの考え方が採用されている(ジーバーツ 2017, pp.89-90)。「近さと遠さ」の再定義(つまり、テルクヴィストによる簡明な2つの概念)も参考に、地域内経済循環や地域コミュニティと近隣の責任に依拠する「生き生きとした論争に開かれているアゴラ」を、市場の論理とも親和的なグローバルな「システム」へ挑戦する概念として位置づける(ジーバーツ 2017, p.94)。そして、アゴラとしての「間にある都市」の資質が危機の時代に備えるための基盤を形成していて、「自助と近隣との私的な連帯の場」として希求されている(ジーバーツ 2017, p.95)。そのうえで、ジーバーツの研究の原点的存在となっているケヴィン・リンチによる「イメージ」や「知覚と記憶」の発想、人々の心象風景を反映しうるデ

ザインを通じた社会的な合意形成の手法が加味されている（ジーバーツ 2017, p.109）。「イメージは、量的、質的情報のみならず感情や雰囲気や気配を伝達し、移入する性質を持っている」とし、「複数の異なる解釈を仲立ちし、相互理解のための橋となり得る」としている（ジーバーツ 2017, p.103）。

もちろんジーバーツは、先ほどより確認してきたように広域都市圏への展望を示すとともに、プランナーであるため最終的には「理性で理解できるようにすることの意義」を強調する。一方では「ローカルとグローバル」「時間と空間」「都市と自然空間」の調整がまだ解けない（ジーバーツ・蓑原 2006, p.161）というジレンマも抱える。その解消に向けて、ジーバーツが地域コミュニティレベルでの「アゴラ」という感情や意識の側面からもグローバル経済による市場の侵食への問い直しそうと試みたことに、『「間にある都市」の思想』のおもしろさがある。

2.3. 3つの問題提起と「田園都市」

さて、『「間にある都市」の思想』で主張されている2つの指向は、いずれもスケールへの見方が関わってくる。ただ、Hesse (2004, p.71) が指摘するように、「間にある都市」では *Peripherie* と呼ばれる空間も考えられているし、その総体として都市圏 *Stadtregion* としても用いられる。その結果、「この概念によって正確には何が言いたいのか？何をこれによって連想することができるのか？」（Hesse 2004, p.71）とする批評も存在する。これは、「間にある都市」のスケール観が、読者にとってやや分かりづらくなってしまっている状況を物語っているものであろう。

「間にある都市」は、グローバルな「システム」という問題に対処するために、広域都市圏という空間と「個別領域」で構成されるコミュニティという比較的小規模なスケールとの相互関係を講じていると理解してよい。「間にある都市」は、双方のスケール観が含意されているものと理解される。そのなかでジーバーツは、「間にある都市」の「きめ細かな粒子」における日々の取り組み、すなわち、小さなスケールでの諸事業が鍵を握る（ジーバーツ 2017, pp.102-103）と提起したのである。そこでは、都市部だけでなく周辺となる農村や田園も含まれる田園都市が話題の中心となってくる。したがって、広域都市圏を考察する前段階としてジーバーツが示した田園都市としての、比較的小さなスケールでの課題と対応策を深耕する論点が大切となる。特に本研究では、ジーバーツの問題提起が最も端的に表現された、以下の3つの「大きな疑問」（ジーバーツ 2017, p.73）を議論の俎上に

のせておきたい。

ジーバーツのいう3つの「大きな疑問」とは、「時間と開発」「自然と文化」「差異化と生活の共同化」への問題提起である。これらの問題提起は、前節でも検討した「アゴラ」と関わるものといえる。まず第1に、「時間と開発」に関してである。ジーバーツは、「時間をいかに扱っていくのか？」と読者に向けて問いかけることからこの問題に迫ってくる。歴史的なモニュメントと適切な場所での建物のストックの保護は不可欠なのだが、不断に循環する経済のなかで「間にある都市」には、自らを再生し、適応させるための戦略的な空間の対価を払って確保する保証、価値が与えられていることが指摘されている。そして、個別の建物が遊休化や無用な状況となっている期間、再生されて価値が戻るまでの期間への道筋を辿る重要性が示される（ジーバーツ 2017, p.73）。これは、近年の日本でも生じてきているような、中心市街地の衰退、空き家の増加に対処するための土地利用の新たな道筋をつけることの重要性を説いたものといえる。そして、「継続的な用途の変更、転用、修繕、改築、模様替え、置換」をするためには、時間軸を取り入れることで解消する（ジーバーツ 2017, p.72）とジーバーツは喝破する。ジーバーツの見方からは、中長期的な空間構造を考えた場合、土地利用をどのようにしていくか避けて通れない論点となりえることが理解される。

第2に、「自然と文化」に関してである。ジーバーツは、将来の自然に対して、「歴史的な」自然を維持していくために自然を保護していくことが本質的に重要と説く。特に、「自然破壊型の開発という悪と、癒しの母なる自然という善の、古くからある対立を解消すること」への重要性が示されている。そのためにジーバーツは、「もっと革新的なアプローチ」を採用することの是非を問い、革新的なアプローチに基づいて新しく産み出された文化的風景と開発された地域との間での新たな共生関係を展望する（ジーバーツ 2017, p.74）。こうした展望を現実のものとするためにジーバーツは、自然環境と農地保全、農業改革などの政策と都市計画との「一体的」な運用を提案する。もちろん、この一体的な運用の捉え方（あるいは捉えられ方）をめぐっては賛否があるだろうが、少なくとも都市計画学と農村計画学が対話を行うことの必要性を読み取ることができる。田園地域の意義を見極め評価する仕方によって「間にある都市」の方向性が変わってくる（ジーバーツ 2017, p.27）。したがって、改めて田園地域の考え方を、都市計画学と農村計画学が協働しあうなかで再検討する必要がある。

第3に、「差異化と生活の共同化」に関してである。

ここでジーバーツは、ライフスタイルと文化の多様性への扱い方を問いかけている。拡散し、多核化し、差異化するライフスタイルを育む「間にある都市」には、文化的多様性が豊かに備わっているという。しかし、「間にある都市」は同時に、その苦悩も抱えている。すなわち、ジーバーツ (2017, p.17) が他方で指摘する通り、「人類の大半が暮らす生活空間」として「特徴がなく名前の付けようもない空間」が存在するようになってきているのである。「機能的、社会経済的、差異化された文化的多様性を持ちながら、1つの等質的なコミュニティとして成立し、読み解きやすく、暮らしやすい場所になるのだろうか?」(ジーバーツ 2017, p.75) との自問は、「没場所性」(レルフ 1999) への危機感を訴えたものと解釈することができよう。もちろん、「間にある都市」では、上述の場所性と没場所性をめぐる考察までには発展していないが、文脈から読み取ることは可能であろう。こうした人文主義地理学的なアプローチ(レルフ 1999) との対話も試みるなかから、コミュニティが抱える諸問題の解決策を講じることが必要と捉えられる。

ここで少しまとめると、第1から第3の問題に対応していくにあたり、都市計画学、農村計画学、人文地理学による対話を進めることが肝要と理解される。これらの学問分野をこえた対話のなかから、上述の3つの問題への解決策を導きだしていくことが我々の課題となる。その課題ははっきりしたのだが、他方でまだ分からない問題がもう一つ、残されている。それは、『「間にある都市」の思想』の「英語版へのまえがき(2002年)」で疑問が投げかけられた「田園都市」についてである。「間にある都市」は「都市田園連続体」(ジーバーツ 2017, p.7) と表現されていたように、「田園都市」や「田園地域」が重要なキーワードに挙げられている。『「間にある都市」の思想』では、「田園都市」の考察にあたりハワードへの言及がなされている。その言及において、ハワードの“Tomorrow: A Peaceful Path to Real Reform”の目標がそれほど上手く達成されなかったことへの指摘が功のち、拡張し続ける「間にある都市」の考察がはじまっている(ジーバーツ 2017, p.5)。

問題はその先にある。ジーバーツは、ハワードの「田園都市」に対して苦言を呈しているのだが、ハワードとは異なるもう一つの田園都市論を確認することなく『「間にある都市」の思想』の筆を置いている。しかも「間にある都市」が“ドイツ発”の議論にもかかわらず、ハワードの「田園都市」のみを振り返っていることに違和感を覚えるものでもある。田園都市論を多方面から捉えきれていないことこそ、「部分的には単に多様な都市郊外

部の空間の現象として、著しく定義上の不確かさが残されてしまっている」(Hesse 2004, p.71) との批評の原因があると考えられる。「時間と開発」「自然と文化」「差異化と生活の共同化」へ対峙するためにも、議論の原点となりえる田園都市論の多様性を認識し、“新しい田園都市論”を構想する道筋をつけることが求められる。

3. 田園都市をめぐる省察

3.1. ハワードの「田園都市」

ここからは、いくつかの田園都市論を検討してみよう。“いくつか”と記載したのは、第1章でも述べた通り、田園都市がハワードの専売特許というわけではないからである。田園都市論は実のところ、複数にわたる構想が練られて、様々な政策や事業が実行されたなかで現在に至ってきている。しかし、もう一つの田園都市論とも表現されるハワード以外の理論が、少なくとも『「間にある都市」の思想』では見受けられなかったし、日本においてどうも忘れ去られてしまっている。「田園都市がニュータウンへいたる系譜のなかで位置づけられたことは、田園都市にとって不幸であった」(西山 2002, p.7) のであれば、ニュータウンに限定されない田園都市は、どのような構想のもとで生成されてきたのであろうか。

周知の通り、ハワードの「田園都市」については、2000年代以降だけでも多くの研究(西山 2002 ; 日端 2008 ; 山崎 2016) で紹介されており、いまさら本研究がハワードをめぐる何か目新しい発見を提示するものとはなり得ない。それほど、日本の学界における田園都市の議論は、ハワードが中心になっている。しかし大事なことは、ハワードの理論のみで議論すると、その結果として「間にある都市」が生成されてしまう可能性が高まるパラドックスを理解しておくことにある。そのために本章でも、まずはハワードの「田園都市」について簡潔に精査する。そのうえで、日本とドイツにおける忘れ去られた田園都市論にアプローチする。そして、善かれ悪かれ、ハワード以外の田園都市論にも対峙しておくことが、「間にある都市」という困難を克服するきっかけになりうると論じてみたい。

そのハワードの「田園都市」から改めて振り返っておきたい。ハワードによる「田園都市」とは、簡潔に述べてしまうと、理念と計画によって実現される都市とされている。(西山 2002, p.2)。主には、社会改良主義の都市(日端 2008) が講じられていることに特徴をもっている。1919年には、ハワードとの相談のもとで、英国の都市計画協会によって次の短い定義が採用されている。

「田園都市とは健康な生活と産業のために設計された町である。その規模は、社会生活の完全な手段を可能とするものだが、それ以上であってはならない。地方のベルトで取り囲まれねばならない。その土地はすべて公有か、そのコミュニティのために信託化されていなければならない。」(オズボーン 2016, p.33)

ハワードは、都市の過密、過大化と農村の過疎化を同時に解決する方法として、土地の共有と土地経営、さらに開発利益のコミュニティへの還元、グリーン・ベルト構想や住民参加による町の経営・管理などを挙げている。コミュニティと空間構成に関する様々な提案は、資本主義の原理を根本から問い直す斬新さを持っていたとされている(西山 2002, p.3)。『明日の田園都市』には、上述のフレデリック・オズボーンとルイス・マンフォードによる2つの論考が掲載されているが、マンフォードは次のようにハワードを評価する。すなわち、ハワードは都市開発の問題すべてに取り組み、単にその物理的成長だけでなく、コミュニティ内部の都市機能の相互関係、都市と地方のパターン統合、都市生活の活性化、地方生活の知的社会的改善に取り組んだとする。それは、「地方部と都市部の改善を単一の問題として取り扱う」ものであったという。そのうえで、ハワードの定義した「田園都市」は、「郊外ではなく郊外のアンチテーゼ」と位置づけられている。マンフォードはハワードの主要な貢献を、バランスの取れたコミュニティの性質を概観したものとしている(マンフォード 2016, pp.50-52)。

しかし、マンフォードによる評価とは裏腹に、ハワードの「田園都市」は、オズボーンによる「戦後のニュータウン」を建てることに動員されていく。「住宅と工業の改修を都市改善と結びつけるという広範な政治的ニーズは、既存の自治体圏内での都市拡大や宅地開発という、ドロドロした無駄の多い試みに従属させられるものとなってしまった」ことは、英国だけでなく日本においても同様であった。その結果、「ニュータウンがなかったらどうなっていたかを考えてほしい」(山形 2016, p.282)というような反論も登場するほど、ハワードの「田園都市」はニュータウンの基盤となっていった。確かに「田園都市」は「物的空間計画を中心とする都市計画の研究対象になってきた」。そのようななか都市計画の研究は、田園都市がもつ社会改良的な理念、つまり、「都市を住みかつ働く生活の場ととらえ、また労働者階級にも豊かな居住環境を保障し、住民が自然と共生するライフスタイルをもち、町の経営にも主体的に参加する都市であるという理念を見落としてきた」(西山 2002, p.7) のかもしれない。

い。他方で、「田園都市をつぎつぎに建設し、全国的に広めていくことで社会全体が変革されるという、漸進的社会改革をめざす社会運動論にもとづく広域都市論」(西山 2002, p.34) という二律背反的な論評が加えられ続けているようでは、「間にある都市」をこえることはできないだろう。

問題となりうるのは、「計画 vs 理念」の構図よりもむしろ、次の自明にある。すなわち、「富の形態というのは、まさに本質的にはかないものであり、さらに社会の状態を前進させるための、もっといゝ形態によって絶えず置き換えられる運命にある」(ハワード 2016, p.222) とするハワードの根本的な見方である。確かにイノベーション論の創造的破壊(シュムペーター 1995) のような見方そのものは分からないでもないし、資本主義社会においては起こりえることであろう。しかし、「きわめて永続的で長持ちする物質的な富の形態が一つだけある。…地球はあらゆる現実的な目的から見て、永遠に続く存在だと考えていい」(ハワード 2016, p.222) との見解は、21世紀も19年が経過した現代において時代錯誤だろう。郊外での計画的な住宅地開発である「田園郊外」(西山 2002, p.108) 化は、ハワードの上述の見解が存在する限りにおいて自明であったといつてよい。「間にある都市」が増殖する理由を与えてしまったと言わざるを得ない。

「町・いなか」ではあらゆる混雑した都市で楽しまれているのと同様、いやそれ以上の社会的な交流がいかんとして楽しめ、しかも自然の美しさが、そこの住民一人一人を囲み、包み込むようになるかを示そう」とのハワードの理念そのものは、現代にも通じるものがある。しかし、「成長しても、町の社会的機会や美の便利さは、失われたり破壊されたりすることはなく、むしろ拡大し続ける」(ハワード 2016, p.233) との楽観主義には、改めを求めていく必要がある。楽観主義は、オーウェンの「空想的社会主義」の影響といえる(西山 2002; 山崎 2016)。もちろん、オーウェン主義のすべてが悪いわけではないし、社会的連帯経済の重要性が示唆されつつあるなか(杉山・松田 2018)、原点の一つとも位置づけられるオーウェンの取り組みへの回顧は分からないでもない。しかし「田園都市」との関連において、楽観主義的なモデルとしての社会改良主義的都市の建設が通用する時代は、終焉を迎えつつあることを認識しておくなければならない。

ジーバーツも指摘した、グローバルレベルでの市場論理が拡大し続けた結果、「間にある都市」が生成されてきた、この事実をハワードの田園都市論から再認識する必要がある。やや飛躍するようには映るかもしれないが、たとえば、郊外化の象徴としても語られる「8マイル道路」

による分断とともにデトロイト市が財政破綻したことは記憶に新しい。人口が減少し縮小に向かう都市において (矢作 2014, p.23, p.46)、ハワード自身が引用したハーバード・スペンサーの「絶対的倫理の格言」(ハワード 2016, p.203) の意味をいま一度、ハワード論者たちには省察的に見つめ直すことが求められている。

3.2. 日本における田園都市構想

日本において「田園都市」といえば、いまなおハワードに依拠する傾向が強い。しかし、残念ながらニュータウンの基盤的概念となってしまうているハワードの『明日の田園都市』を、ニュータウン以外の田園都市に当てはめて検討するには無理がある。先ほども触れた西山 (2002) や山崎 (2016) が指摘した通りハワードは、オーウェンらの空想的社会主義の影響を強く受けていた。そもそもだが、国家権力を否定するコミュニオン理論とそれが結合して構成されるアソシアシオン理論の影響を受けたハワードの「田園都市」が、中央集権的に「国家の解釈する田園都市」として普及してきた日本 (西山 2002, p.35) で齟齬が生じるのは、それほど理解に苦しむことではない。

日本における田園都市論の再検討をめぐり求められるのは、ハワードの理念を適用させようと努力を試み続けることだけでは不足することへの認識にある。ニュータウン以外の田園都市群が「間にある都市」として苦悩を抱えていることに学界が向き合っていくためには、内務省地方局有志たちによる田園都市構想の系譜についても、賛否はあれ、捉え直しておく必要がある。この捉え直し、日本における「間にある都市」考察のスタート時点であろう。無論、これまでも内務省地方局有志による田園都市構想が考察されてこなかったわけではない。たとえば、2000 年に入ってから『農村計画論文集』では、飯沼一省による田園都市論の解釈に関する研究があり、そのなかでハワードの「田園都市」と内務省の田園都市構想との比較がなされてきた (村上 2000)。

ここで重要な指摘として振り返っておくべきことは、内務省地方局有志 (1980) の田園都市構想が、ハワードの「田園都市」の紹介書というよりも、地方の小都市・農村の繁栄を目指した「啓蒙書」であったという点にある。この「地方小都市や農村から発想する」という計画理念は、欧米の影響ではなく官僚であった飯沼による独自の理念の展開とされている (村上 2000, pp.196-197)。内務省の田園都市構想では、序論において、小都市・農村としての田園都市や花園農村と、現代のニュータウンに該当する「新都市」「新農村」が明確に区別されている

(内務省地方局有志 1980, p.17)。その前者を、「都市農村の改良」を目指す動きと位置づけて、「一国全般の発展力」「国家繁栄の基石」としての田園都市の理想と打ち出していく (内務省地方局有志 1980, p.19)。もちろん、内務省地方局有志 (1980) では、ハワードも「田園都市」の先駆的な主唱者として触れられている。しかし、ハワードに関する記述はごくわずかにとどまっている。むしろ、内務省がベースとしたのは、イギリス土木学協会の一員であったセンネットによる『田園都市』にあった。「清新なる農村の趣味を活用して現都市を改良し、または新都市を造りて、大都会にまめかれがたき弊風を絶たんとすることその一なり」「健全なる田園生活を尊重して、これに加味するに都市各般の文明事業をもってし、ますます農村の培養とその改良とを図らんとすることその二なり」との指向は、センネットからの影響によるところが大きい。内務省は、センネットの考え方を基盤としながら後者について、自治生活、公共事業、殖産に関して「公益」により推進することと、協同組合による「救貧防貧」をめぐる分かれあいのなかから説くに至っている。そのうえで、「理想の都市、理想の農村如何を究め、最善の自治を行わんがために必要なるいっさいの事業に説き及ぼす」との目的と、都市と農村両者の特徴を存したいとの趣旨が記されている (内務省地方局有志 1980, pp.22-25)。

さらに興味深いのは、コミュニティにかかわる問題や協同組合を論じるにあたって、オーウェンのみに依拠していないことであろう。もちろん同書では、オーウェンやオーウェン主義を継承しつつ 1844 年に設立された、ロッヂテールの協同組合にも言及されている。しかし、ハワードのように空想社会主義と揶揄されたオーウェン主義一辺倒にとどまっていないことにもう一つのポイントがある。すなわち、ドイツのライプハイゼンの農民救済や貸付銀行に関する取り組み、シュルツェによる協同組合論をはじめ、イギリス以外のヨーロッパ諸国の協同組合の形態に関心が寄せられている (内務省地方局有志 1980, pp.211-280)。この協同組合への展望が、社会的連帯経済の議論 (=アソシエーション論) であり、田園都市における経済循環を高めるための組織活動の関心につながってきている。

明治期以来の日本の田園都市構想をどう評価するのかについては、意見として二分される可能性はある。当然ながら、ハワードと同様に、現代日本と時代背景も異なる。ただ、先ほども触れた村上 (2000) が評したように、地方小都市や農村からの発想を試みたことには理解を示す必要がある。日本のニュータウンでない田園都市の原

こうした着想は、「田園都市」の建設を重視したハワードと異なるポイントであるし、日本の田園都市構想にも通じるものがある。前節で触れたように日本の場合も、既存の小都市や農村の振興やドイツの協同組合が考察されてきた諸点を勘案すれば、ドイツの田園都市論に近い発想をもってたと理解される。センネットの影響もあるが、少なくともハワード型ではなかったのである。そのなかで、現代において「間にある都市」という問題を抱えるに至った事実を捉えておかなければならない。これは、オズボーンによる「田園都市」建設やその後のニュータウン建設の流れだけで「間にある都市」へのアプローチが困難となる理由となる。

さて、話を戻すが、シュミットの都市論は広域圏都市、地域計画のなかの都市を論ずるもので、「田園都市論と呼んでいい」内容だったとされる。それは、マルチン・ファンシュミットにより「産業・生活田園都市 *Industrie- Wohn- und Gartenstadt*」と表現されている。この表現は、ハワードの「田園都市」よりも田園都市の実体を把握するうえで有効的なものかもしれない。経済的都合だけによる工場立地を否定し、「工場に代わって人間を」という基本から出発したシュミットの田園都市論(祖田 2016, pp. 31-33)は、ジーバーツの「間にある都市」での指向や問題提起に結びつけやすいものと捉えられる。

「世界でもはじめての、もっとも体系的かつ近代的な“地域総合計画 *regionale Gesamtplanung*”を示した」原点として「産業・生活田園都市」を取り扱った方法論(祖田 2016, pp.32-33)も、ジーバーツに通じるものといえる。もちろん、今日のドイツでは、シュミットに端を発した地域計画も、ナチス政権下から第二次世界大戦後の経済復興期、東西ドイツ統一を経るなかで変化を遂げてきている。場合によっては、結合されすぎた結果としての「間にある都市」の現出につながった可能性も否定できない。

しかし西ドイツ時代以降、一貫して論じられてきたのは、「可能な限り都市と農村地域を連動させ、地域構造政策を掲げ、他の国や地域に比べ、相対的によりバランスの取れた多数核分散型空間」の形成にあったろう。レプケ、ディトリヒ、クリスタラー、イスバリー、レッシュなどの理論をバックグラウンドとして伝統的な地域主義的理念が脈々と流れるとともに、レプケ以来の社会的市場経済の理論と「地域主義」がその思想的背景になってきたのである(祖田 2016, p.143, p.160)。その基本精神そのものは、いまの時代においても色あせてはいない。

それにもかかわらず、「間にある都市」と表現される危機意識が、膝元のドイツから関心事となってきている。

現代のドイツは空間整備政策という観点からみて、環境問題、旧東ドイツ問題、EU との協調問題を抱えているが、その解決にあたってはいずれも地域政策的視点を重要視しているとされる。EU の空間整備政策についてもドイツの理念が評価され、拡大されている(祖田 2016, p.184)。おそらく、ジーバーツが「間にある都市」において指摘したかったであろうことは、拡大し続ける「システム」的な空間政策を前に、人間にとって適正なスケールをもう一度見直し、再発見を促す希求にあったろう。先程来、参照している祖田自身も、その論文のなかでスケールの問題に敏感な一面があった。すなわち、地域研究がドイツにおいて、地理学の成立とともに学問的発展を遂げた事実を説き、フンボルト、ラッツェル、ブラーシュ、ハーツホンなど地理学で馴染みの識者たちの見解を踏まえながら地域概念を定義する注意を払っている(祖田 2016, pp.222-223)。こうしたスケールの問題を捉えていると、合理性が重視されるグローバル経済を前に困難に直面する広域都市圏とローカル・スケール双方の葛藤が必然とみえてくる。

大事になる論点は、経済価値、生態環境価値、生活価値(社会的・文化的価値)という主要な3つの価値の均衡を目指してきたドイツにおいてすら、強力な「システム」により、足元が崩れかかっている現状を捉えられるかである。こうした崩壊を防ぐうえでも、都市計画学界では、都市機能の整備・維持をより広域的な枠組みで担う「水平的機能分担型広域連携」について、ドイツを事例に検討もされてきている(姥浦・瀬田 2011)。しかしながら他方で、ローカル・スケールでの「産業・生活田園都市」の理念で掲げられた、シュミットによる「仕事をし、生活し、遊ぶという基本的欲求」(祖田 2016, p.32)への振り返りもあわせて求められる。

というのも、農村計画学界だけでなく地理学界においても森川(2015 ; 2016)が、人口減少が進む日本の地域政策への展望にあたって、ドイツに倣った「高次都市機能の分散と空間整備政策の採用」を改めて促してきている。ドイツの空間整備政策における「点と軸による開発構想」にも問題があるとの留意が示されながらも、そのなかでは中小都市の活性化が地域政策のなかでも特に重要な課題に設定されている。中小都市が「消滅」すれば、そこから生活に必要なサービスを受ける圏内の農村部が衰退することは間違いのない(森川 2016, p.12)との危惧を克服するために、広域都市圏の問題を意識しながらも、まずは第一段階としてのローカル・スケールへのアプローチが希求されていると理解されよう。

4. ケーススタディー兵庫県西脇市

4.1. 西脇市の概要

ここまでは概念的な議論を進めてみた。「間にある都市」を克服するためには、1) 広域都市圏、2) 「システム」「アゴラ」の葛藤という 2 つの指向のもと、他方でローカル・スケールにおける都市、農村、コミュニティにかかる 3 つの問題への対応が必要と提起されていた。その際に主な対象となるのは、ニュータウンのみでない田園都市となる。本研究は総説的な論文であるため、詳しい内実を明らかにする研究は別稿に置いている。ただ本研究でも、中小都市スケールの田園都市に関して具体的なイメージを読者に持ってもらい、「間にある都市」をめぐる前章までに検討した諸点を超克するための知見を獲得する一過程としてケーススタディが必要となる。そこで以下では、兵庫県西脇市を事例に検討を進めたい。

まずは、西脇市の概要を確認しておこう。西脇市は兵庫県のほぼ中央部、東経 135 度と北緯 35 度が交差する地点に位置している (図 2)。このことから西脇市は、「日本のへそ」と言われることもある。地形としては、中国山地の東南端が播磨平野に接しており、標高 200~600m の山地や丘陵に囲まれている。中央部には加古川が流れ、市域南部で杉原川、野間川と合流している。河川沿いに開けた平野部に集落や農地が形成されてきた。面積は 132.44 km²となっている²⁾。西脇市の人口は、減少傾向が続いている。2018 年 8 月 1 日時点で 40,943 人となっており、65 歳以上の高齢化率は 32.1%である³⁾。

ここで西脇市の土地利用の状況およびその方針を簡潔に確認しておきたい。図 3 に示した写真は、西脇市の土地利用の様子がよく理解される、西脇市の原風景が現れた一枚といえる。旧西脇市の大部分は東播都市計画区域に属し、比延地区の一部と黒田庄地区の全域が都市計画区域外となっている。市街化区域は、杉原川沿いの市中心部に比較的コンパクトに設定されている (図 4)。播州織工場等が立地してきた歴史的経緯を反映し、準工業地域 (構成比 34.6%) が広く指定されていることに特徴を持つ⁴⁾。図 4 に示される「市街化ゾーン」「田園居住ゾーン」と呼ばれる区域ほど、図 5 の階級区分図に示す通り、人口密度が集中している様子が伺える。

4.2. 「田園協奏都市」への転換と住民の意識

4.2.1. 西脇市を検討することの意義

次に、西脇市を対象とした理由を簡潔に述べておこう。現実の問題として、日本にも「間にある都市」は数多く存在すると思われる。そのようななか、「日本の縮図」とされる兵庫県 (大国 2011, p.22) の市町の総合計画にお



図 2 西脇市の位置
(出所) 筆者作成



図 3 西脇市の風景
(出所) 西脇市提供

いて、都市像として田園都市を直接的に謳っているのが、西脇市を事例とする理由である。西脇市は、先述の 2005 年 10 月の合併に伴い、2007 年より本研究公表時点で現行の総合計画が施行されている。そのなかで、恒久的な都市像として「人輝き 未来広がる 田園協奏都市」(2007 年 9 月の告示、制定) を全面に打ち出したことに特徴がある。西脇市による「田園協奏都市」という言葉には、豊かな資源と多様な特性を持っている西脇市において、「住まう人々が、ともに力を合わせ、いきいきと輝く、

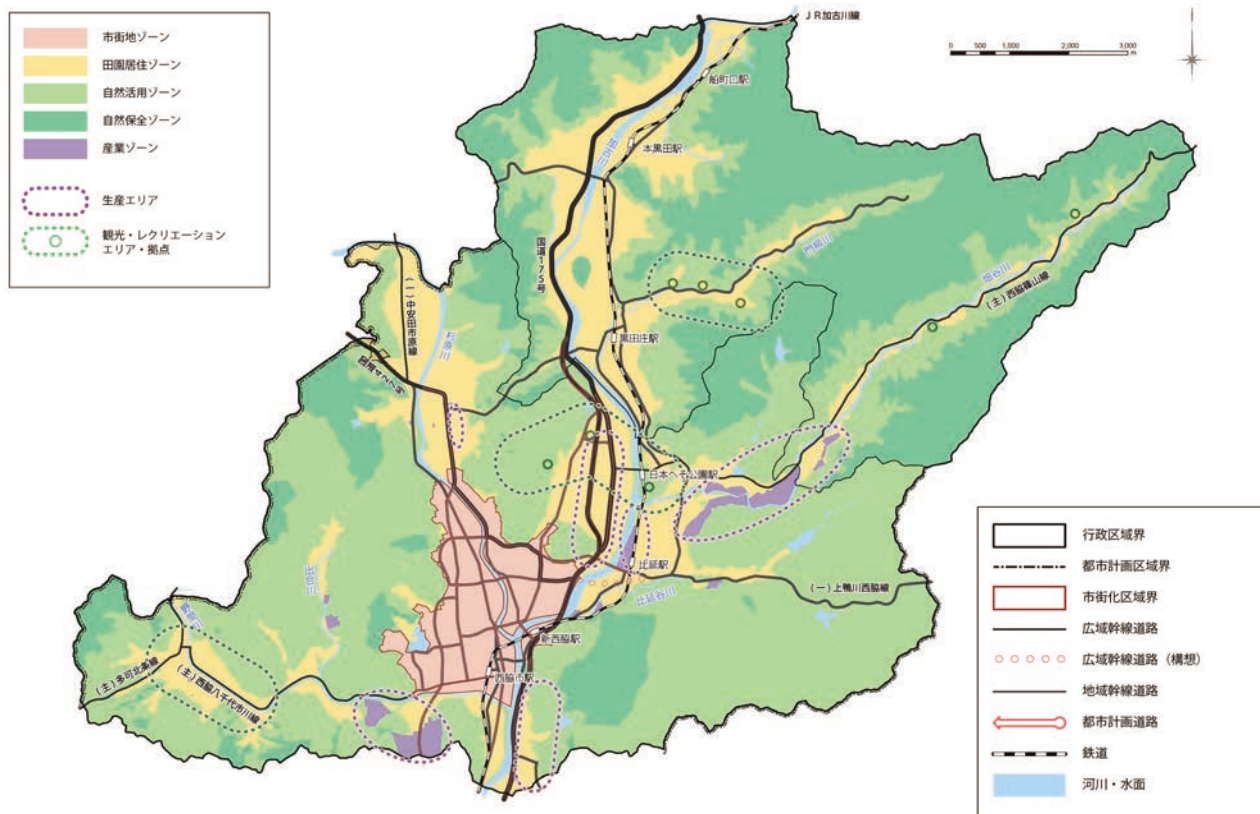


図4 西脇市の土地利用方針図

(出所) 西脇市総合計画基本構想パブリック・コメント資料より (2018年9月1日時点。2018年9月1日使用許可)

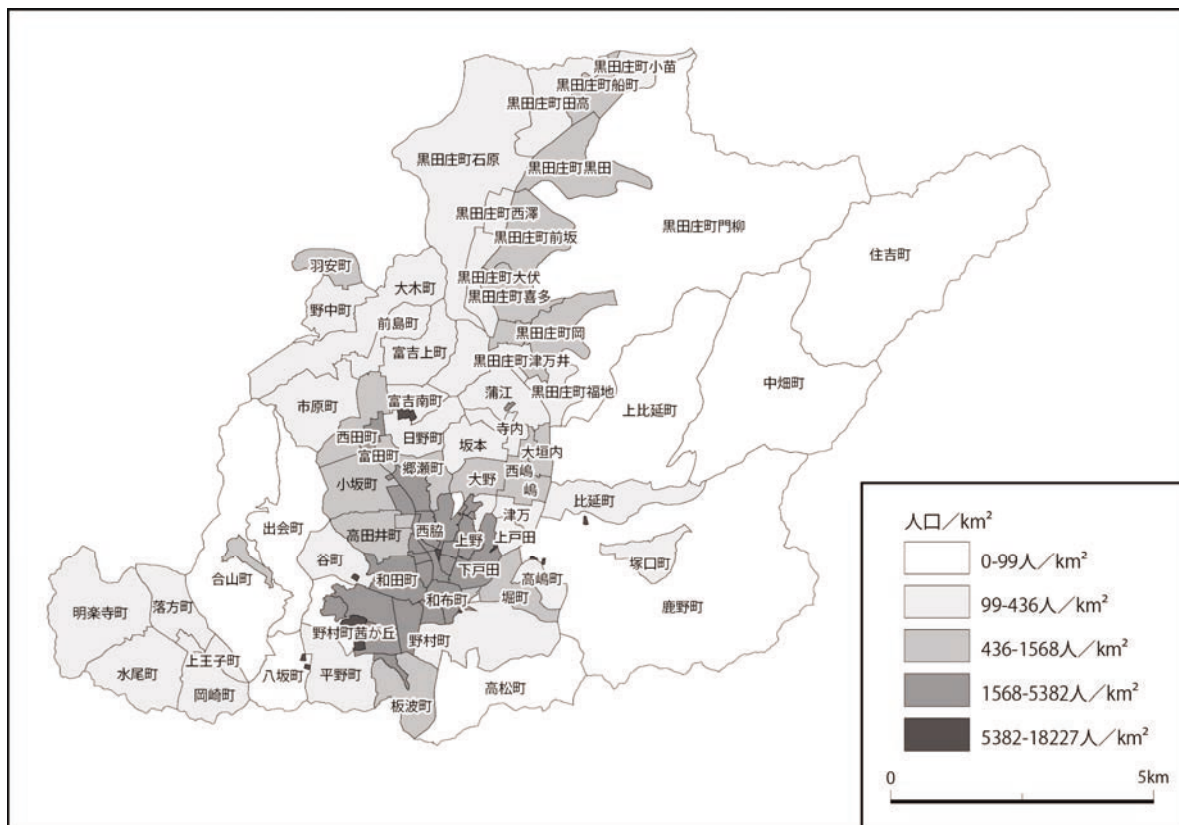


図5 西脇市の人口密度分布

(出所) 「平成27年度国勢調査」に基づき作成

未来への広がり期待できるまち」を目指したいとの思いが込められている⁹⁾。もちろん、総合計画に謳い、「田園都市」と自ら宣言することが田園都市の要件ではない。しかし総合計画は、住民の意識や意向も汲み取られながら策定されるものでもあることから、少なくとも西脇市が田園都市を指向していると判断する一つの目安になる。

さて、西脇市は、播州織産地として一時代を築き上げてきた都市として知られている。先行研究においても、綿織物工業の輸出の問題を扱った瀧谷・藤井(1940)を皮切りに、戦後も播州織の歴史から発展経緯を論じた金子編(1982)、播州織産地の社会的分業の構造を明らかにした竹内(1983)、2000年頃の播州織産地の現状と展望が示された辻田(2001)などが確認される。これらの研究からは、播州織の産地として成長を続けてきた西脇市の都市像を垣間見ることができる。

近年においても、播州織の見本市が東京において積極的に開催されているし、「西脇ファッション都市構想」¹⁰⁾が政策的に推進されるなど、播州織産地の新たな姿も表象されるようになってきている。しかし、これから詳しく検討するように、西脇市は播州織を中心とした都市像のみが打ち出されているわけではない。たとえば、西脇市は2005年に旧黒田庄町と合併したが、その旧黒田庄

町では「西脇産業圏」の一角を担うとともに神戸ビーフの素牛となる「黒田庄和牛」の生産が推進されるなど農業の振興にも力が注がれてきている⁷⁾。また、先述の図4に示されている通り、自然環境が豊かに広がっている。播州織の生産を中心とする産業都市としての姿だけでなく、農業や自然豊かな姿も捉えられること、すなわち、産業都市から田園都市への転換を論じることができることに西脇市を検討する意義がある。

4.2.2. 人と暮らしを重視した「田園協奏都市」への転換

次に、都市像として示された「田園協奏都市」がどの程度、住民の間で浸透しつつあるのか、一例を確認してみよう。2017年度から2018年度にかけて西脇市では、次期総合計画が検討されている。そのなかで、2018年6月に総合計画審議会の将来像検討部会が開催された。この部会では、住民を中心とした委員によりワークショップ形式にて将来像が話しあわれたが、次の図6のような結果が示されるに至っている⁸⁾。

この話し合いの結果に特徴的なことは、次の諸点にあらう。すなわち、播州織の「織」を鍵としながらも、住民の暮らしや福祉の向上、連帯意識の醸成や近所づきあいの活性化にかかるコミュニティづくりや助けあい、支えあい、次世代を担う子どもたちを育むこと、安心・安

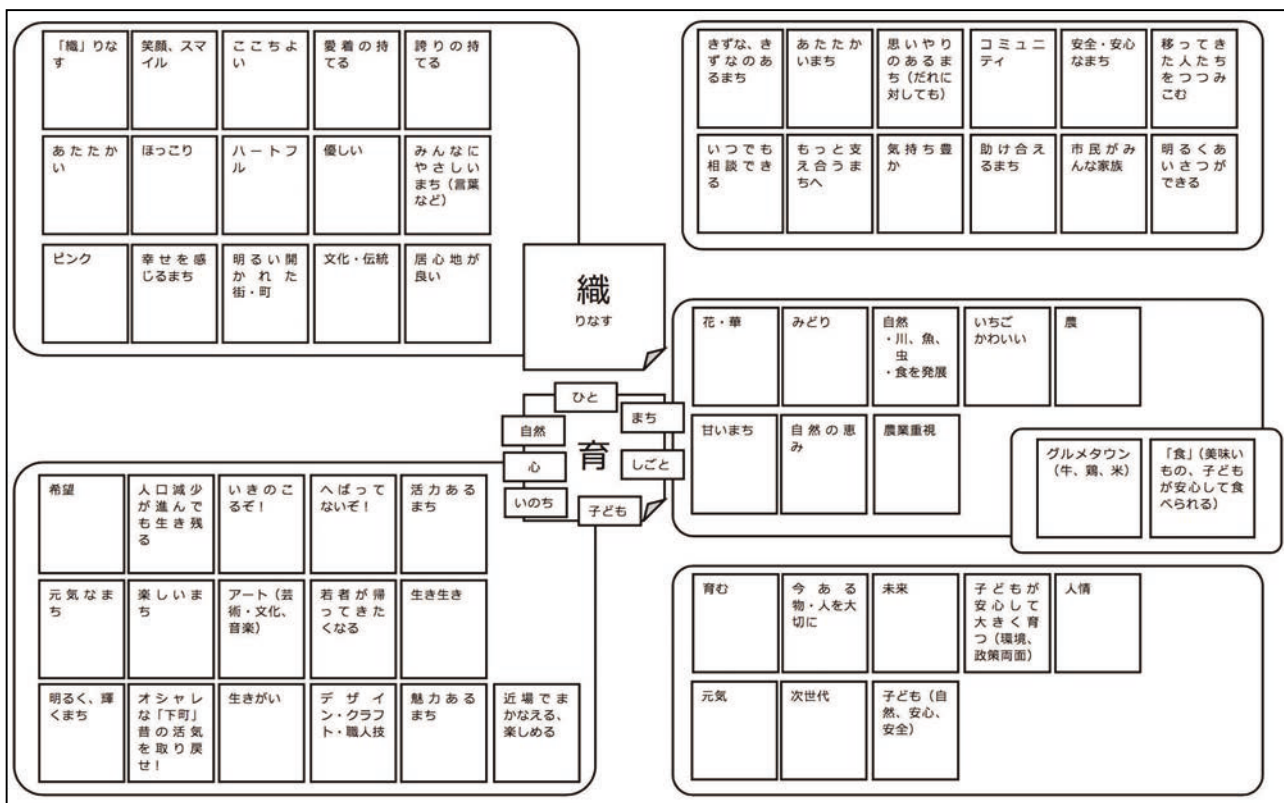


図6 西脇市の将来像をめぐる意見

(出所) 西脇市総合計画審議会公表資料より (2018年8月31日時点、2018年8月31日使用許可)

全なまちづくりを推進することなどが意見として多く提案されたことにある。一方で、市街地を中心に形成されてきた下町のよさを芸術、文化、音楽など創造産業的な要素から再発見を促すような見解も出されるとともに、デザイン、クラフト、職人技などの見直しも提案されている。さらには、西脇市が育み続けてきた自然環境や農業を重視していきたいとの意見や「食」を通じた活性化策なども意見が出された。

その結果として、最終的に 2019 年度から 12 年間の将来像として「つながり はぐくみ 未来織りなす 彩り豊かなまち にしわき」が提案されるに至った。まず、「つながり はぐくみ」には、自然や文化など個性と魅力にあふれた西脇市の多様な資源のつながり、人と人とのつながりのなかから西脇市を発展させていこうという想いが込められている。特に、西脇市への誇りや愛着といった地域アイデンティティの共有にかかわること、相互の支えあいを地域で育む視点が盛り込まれている。次に、「未来織りなす」は、播州織が念頭に置かれたフレーズでもあるが、旧き良き文化を受け継ぎながら新しい考え方も取り込み、さまざまな要素を組みあわせながら未来を紡いでいこうとする意味が込められている。最後に、「彩り豊か」とは、西脇市の四季の彩りに恵まれた自然豊かな「ふるさと」の風景が表現されている。こうした自然と共生した田園地域において、様々な人がいきいきと暮らし活躍できること、多彩な人々が交流しあうなかから、魅力に満ち多様性をもったまちづくりを進めたいとする願いが込められている。

上述の将来像が住民の手により提案されたわけだが、そこには「田園協奏都市」としてどう暮らしを見つめていく必要があるのか、さらには連帯に基づくコミュニティ感覚をどう醸成していくのかといった意識が現わされた結果が示されているとあってよかろう。播州織産地として一時代を築き上げ、その後の海外市場との摩擦に苦しんできた西脇市だからこそ、産業都市から田園都市への転換がはかられていくプロセスに重みがある。

一方で、住民の一部からは、次のような意見も示されている。すなわち、西脇市の人口構成のなかで比較的ウェイトを占める団塊世代がさらに高齢化したときに対応しうる病院などのインフラへの問題、空き家対策への意見も確認されている。これは、ソフト的な暮らしへの意識とあわせて、土地利用をめぐる空間デザインの必要性が求められている証左でもある。そうしたなかにおいて、行政に頼るだけではなく、住民たちでできることは自分たちでもするという見解があわせて示されていることが大きい点となっている。

以上の西脇市での経験からは、これからの田園都市にとって必要な論点が示唆されていると理解される。上記にみた将来像の検討からは、西脇市に住む人々の暮らしを守り、育てていくための行動指針が示されるとともに、自らが住む場所への誇りや愛着の再発見が促されようとしていた。一方で、若年層へのアプローチや今後のさらなる高齢化を想定した場合、中長期的には土地利用をどのようにしていくかも避けて通れないことが示されたといえる。これらをうまく組み合わせた具体的な仕組みの検討が、次の課題として残されている。

ただ、そうした行動を現実のものとする前提として、“新たな田園都市”像が示されたことは、指針として大事となろう。図 6 の西脇市資料の言葉を借りるならば、苦労はあるものの、産業的な「いきのこぞ！」というメッセージと、暮らしの面での「へばってないぞ！」というメッセージが織りなされる、成熟期における“新たな田園都市”像が求められている。

4.3. 西脇市での新たな動き

4.3.1. 「西脇ファッション都市構想」

さて、“新しい田園都市”を講じていくために、どのような取り組みが対象となりうるのか、本章の最後に検討しておきたい。ここでは、西脇市の行政や地元でのいくつかの試みを概観しておく。なお、繰り返になるが、本研究はあくまで“新しい田園都市”構想の一端を示唆することに主眼があるため、以下の具体的な中身については、稿を改めて考察していくことに留意されたい。

まずは、播州織と関連する「西脇ファッション都市構想」である⁹⁾。「西脇ファッション都市構想」は、2015 年より進められている政策である。西脇市では、10 歳代後半から 20 歳代の若い世代が、進学や就職に伴い阪神間など大都市圏へ流出する現象があり、播州織を支える若手人材が不足しているという。これまでの強みである素材生産を中心とした製品づくりを強化することに加えて、織物を使った最終製品までデザイン、製造するファッション分野の産業として伸ばさせていくことが志向されている。

これは、従来の工業化、産業化の視点よりもむしろ、創造的産業のようなクラフト産業の産地として新たな意味づけがなされた構想と捉えられる。選択されているキーワードも、次世代を担う「ひと」、産地としての「にぎわい」、長年にわたり蓄積されてきた「わざ」を生かす視点が重視されている。そうした新たな産地像を提示するなかで、人材育成、就労、移住・定住を促進しようとしている。「西脇ファッション都市構想」を通じて 2018 年



図7 「CONCENT」の内観
(出所) 筆者撮影 (2017年6月17日)

8月時点で、20名の若手のデザイナー研修生たちが西脇市に移住し、播州織の新たな担い手として期待されるようになってきている。デザイナー研修生たちは、播州織を生産する地元企業に勤めながら研修する一方で、西脇市の市街地に位置するコワーキングスペース「CONCENT」(図7)での活動を通じてインスピレーションや刺激を受けながら相互に学びあっている。運営主体は、西脇商工会議所(西脇TMO)である。

「西脇ファッション都市構想」は、高度経済成長期の「ガチャ万」と呼ばれた景気の良い時代から斜陽まで経験した産地像の転換を促すきっかけとして重要な構想となりえる。すなわち、若い世代が「田園協奏都市」西脇市においてどう働き、どのように暮らしていくのか、創造的産業としての播州織と日々の生活・暮らしの新たなあり方が模索されている動きと捉えられる。

4.3.2. 新庁舎移転計画

次に、西脇市の市街地における新たな土地利用をめぐる動きを紹介しておきたい。西脇市では、2018年8月時点における現庁舎の老朽化に伴い、必要に迫られた措置として新庁舎の建設と移転計画が進められている¹⁰⁾。西脇市の市街地の東側には、撤退した大型商業施設の跡地があり、その跡地への移転が計画されている。西脇市によると、市街地の中心部に新庁舎、市民交流施設を立地させることで、既存の病院、文化・スポーツ施設等とあわせて、都市機能がコンパクトに集積したコンパクトシティの形成が想定されているという。新庁舎は、その核になる施設として2020年の完成が予定されている。その新庁舎は、高齢化が進む西脇市の現状を鑑みながら「健康」というコンセプトを軸に据えたものとなってい

る。そして、1)「市民の安全・安心な暮らしを支える」こと、2)「暮らしに身近で、誰もが使いやすい」こと、3)「まちの未来を創り、交流の拠点となる」ことが指向されている。

一方で大事なことは、新庁舎建設・移転そのものではなく、西脇市の中心市街地のあり方を住民たちが検討し直していくことにある。新庁舎移転計画とあわせて2017年6月には、「まちなか活性化計画策定」にかかる市民ワークショップが開催されている。当該ワークショップでは、1)中心市街地の住民や各種団体、公募市民から構成される「まちなか会議」、2)地域で様々な活動をしている住民、事業者、市職員から構成される「まちなかFUTUREMAP」が実行されてきている¹¹⁾。新庁舎移転を契機に、西脇市の市街地の将来像の議論が開始されている。こうした土地利用をめぐる動きも、「田園協奏都市」西脇市において検討が続けられる必要のある取り組みと捉えることができよう。

4.3.3. 複合施設「Miraie」と周辺の住宅地

続いて、西脇市の市街地から西側にある新興住宅地の様子を確認しておきたい¹²⁾。西脇市にも小規模ながら、いくつかの「ニュータウン」的な住宅地が存在する。たとえば野村地区には、緑風台と茜が丘という2つの住宅地がある。緑風台は1970年代後半の分譲開始から約40年が経過している一方、茜が丘は2000年にまちびらきが行われた「ニュータウン」となっている。

その野村地区において、2015年10月に「西脇市茜が丘複合施設 Miraie(みらいえ)」が開館している(図8)。「Miraie」のコンセプトは、「人つどい 人つながり 人はぐくむ 交流の場」となっている。このコンセプトのもと「Miraie」には、「こどもプラザ」「男女共同参画センター」「図書館」「コミュニティセンター重春・野村地区会館」の4つの機能が備わっている。「Miraie」には、「まちの未来につながる理想の居場所になるように」との思いが込められているが、西脇市によると、社会学者のレイ・オルデンバーグ(2013)の「サードプレイス」という概念を基盤にしているという。

その「Miraie」が立地する周辺の緑風台と茜が丘では、今後の課題も散見されている。たとえば、茜が丘の高齢化率は5.45%と若い世代の住む世帯が多いが、他方で緑風台の高齢化率は38.81%と高くなっている¹³⁾。これは時間経過に伴うものであろうが、コミュニティにより住民の世代が異なること、すなわち、新旧「ニュータウン」のあり方を講じていくことが求められる。特に、緑風台が経験している高齢化問題は、茜が丘が将来、経験しう



図8 「Miraie」外観
(出所) 筆者撮影 (2017年6月17日)

る可能性のある問題でもある。そうしたなかで、「Miraie」を核としたコミュニティづくりをどう進めていく必要があるのか、内実を明らかにすることが課題ともなる。

他方で、興味深い動きも確認されている。野村地区は、隣接する重春地区とともに、「Miraie」を核に手を携えた地域コミュニティづくりが指向されはじめている。「重春・野村地区交流推進委員会」は、「Miraie」のコミュニティセンターの指定管理者の役割を担っている。調理室、工芸室、会議室でのイベントの企画・運営、自主講座の開催など、隣接するコミュニティ間の交流と学習が少しずつだが進められるようになってきている。こうした地区間の連携の動きにも関心を払いながら、「Miraie」周辺の動きを捉えていくことが求められている。

4.3.4. 津万地区と比延地区の挑戦

さて、重春地区、野村地区でみられたようなコミュニティづくりは、西脇市の各地区において取り組まれている。これは、緑風台や茜が丘のような住宅地だけでなく、むしろ田園地域において活発になりつつある。ここでは2つの田園地域における事例を取り上げておきたい¹⁴⁾。

1つ目は、西脇市を縦断する JR 加古川線の西側に位置する津万地区の取り組みである。津万地区は、人口4,795人、2,150世帯(2018年8月1日時点)である¹⁵⁾。津万地区のうち坂本集落に「西林寺」という寺院があるが、その敷地のあじさい園の近くに「TUMA こいカフェ」が2016年3月にオープンしている(図9)。「TUMA こいカフェ」は、「生き生き TUMA 協議会」が運営しており、住民が気軽に、安心して集える場所づくりの一環として進められている。また、津万地区では、2016年に取り組まれた「地区まちづくり計画策定」を契機に、地



図9 「TUMA こいカフェ」外観
(出所) 筆者撮影 (2016年11月21日)

域自治協議会設立に向けた動きが高まるなど、さらなるコミュニティづくりに取り組む準備も進められている。

2つ目は、上述の津万地区の南側に隣接する比延(ひえ)地区の取り組みである。比延地区は、人口3,767人、1,503世帯(2018年8月1日時点)である¹⁶⁾。比延地区では、「ええまち比也野里」というコミュニティカフェ兼直売所を運営するなどコミュニティビジネスが積極的に推進されてきている。直売所には、隣接する食品加工場で生産された6次産業化による加工品の販売が行われるようになってきている。2017年5月26日には、西脇市で初となる地域自治協議会が隣接する黒田庄地区と同時に設立され、コミュニティの活性化を目指した動きが活発になりつつある。

特に比延地区で特徴的な動きとしては、移動販売車が導入されていることである。この移動販売車「笑顔いっぱい比也野号」(図10)は、2014年9月より導入された。



図10 移動販売車「笑顔いっぱい比也野号」
(出所) 筆者撮影 (2017年9月21日)

比延地区には小売店舗などが少ないことから、高齢者の買い物の問題が課題となってきた。そのようななか、移動販売車を通じて日用品や食料品などの買い物支援が手がけられてきている。買い物支援の目的以外にも、比延地区の住民たちの交流推進、見守り活動や声かけ運動という目的も設定されている¹⁷⁾。

このように、人口減少と高齢化が進むなかではあるが、田園の広がる地区における住民主体のコミュニティづくりも積極的に進められている。大事なことは、課題に直面するなかでも、住民たちの創意工夫のもと、暮らしに向きあい支えあえるコミュニティが、「田園協奏都市」という理念のもと西脇市の各地区において創造されつつあることにある。20世紀に多く見受けられた工業化の時代とは一線を画する、1) デザインベースのクラフトや職人としての働き方と暮らし方、2) 縮小期における市街地の土地利用の再検討、3) 住宅地における新たな交流のあり方、4) 高齢化に直面しながらも支えあいを基盤とする田園地域の暮らしの模索が、西脇市において始動している。こうした新たな動きを捉えるなかから、「間にある都市」という困難を超えようとする“新しい田園都市”論が構想されていくことを、ケーススタディから理解することが肝要となろう。

5. おわりに—ネオ田園都市の構想に向けて

本研究の最後に、本稿を振り返りながら、今後の展望を示唆してみたい。「田園都市」というと、ハードの理念が重視される傾向にあることは本論においても示した。しかし、本研究はむしろ、日本とドイツの田園都市構想への振り返りを求めてきたことにオリジナリティがあった。日本とドイツの田園都市構想の経緯を振り返ることは、経済成長による拡大路線が続けられてきた「間にある都市」の憂いと解決策の道筋を認識する前提として重大になると考えられる。そこには、オーウェンの理想を参考に社会改良主義的都市を謳いながらも、結局は合理性を重視するハード型の「田園都市」論では理解しがたい世界観が存在する。すなわち、経済的命題の優先(祖田 2016, p.190)への省察が、「間にある都市」への理解を深めるうえで重要になってくる。

ケーススタディにおいても、こうした歴史的経緯と実態が明らかであったろう。たとえば、産業都市として播州織を中心に一時代を築いてきた西脇市では、「田園協奏都市」が新たな都市像として指向されるようになってきている。それに伴い、住民からの意識にも変化が生じていた。すなわち、産業的な要素も大事ではあるがむしろ、暮らし、生活、自然を第一に据える考え方が主流になり

つつある事実である。次期総合計画の策定過程は、そうした考え方の変化が顕著になってきていることを物語っている。そのうえで、市街地での土地利用をめぐる新たな息吹、農村地域での6次産業化による活性化の萌芽、支えあいや分かちあいや生活や暮らしのあり方への問い直しが進められていた。

「経済成長主義」への疑問が投げかけられるなか(佐伯 2017)、工業化や合理化だけに回収されることのない、しなやかな“新しい田園都市”像を構想することの主題は、場所性なき「空間に対する抵抗」の克服にある。誤解のないように言うておくが、空間性そのものが悪く、場所性が単純に良いと言っているのではない。経済的な力に任せきりにより出現した「間にある都市」における「鎖を解かれた経済の中で空間的な自制と練磨」(ジーバーツ 2017, p.186)を試みることで、すなわち、感情(=場所/ローカル)と理性(=空間/グローバル)という二元論をこえた「相互に構成しあっている」世界観への理解が求められている(マッシー 2014, pp.348-349)。「間にある都市」を超克する意義は、ここにある。

そのためにも「間にある都市」の超克は、本研究を踏まえるならば、空間性や場所性に各々の学問的立場から対峙し続けてきた都市計画学、農村計画学、人文地理学が対話することで実現されうるものではなかろうか。特に、ドイツの空間整備政策における「点と軸による開発構想」(森川 2016, p.12)は、当該3分野が織りあわされるなかで論じられてきている。こうした対話は、あくまで一例だが、①中長期的・空間構造に考えると土地利用をどのようにしていくか避けて通れない空間デザインの問題、②現実には人々の暮らしを守り、育てていくための具体的な行動と取り組むべき指針の提示、③空間性と場所性をうまく合わせて循環させるような仕組みの検討などにより前進するものであろう。これを、広域都市圏、中小都市、中山間地域の重層性ととも議論していくことが望まれている。

もちろん、その作業は膨大なものとなる。その膨大な課題に対処していく第一歩として、足場となるローカル・スケールの田園都市のあり方の再検討、そして暮らし、生活、コミュニティへの眼差しを注ぐことが大事となってくる。そのうえで、「間にある都市」の空間デザインが語られなければならない。これは、地道で困難な道のりとなるかもしれないが、既存の田園都市の新たな空間デザインや暮らしを再発見する経験は、「特徴がなく名前の付けようもない空間」とされる「間にある都市」への“命名”、すなわち、“ネオ田園都市”論の構想として表象されていくこととなろう。

この表象のためにも、ネオ田園都市をめぐる具体的な研究を進めていくことが筆者たちの今後の課題となる。日本においては西脇市や播磨地域の各都市・地域、「もう一つの田園都市」の舞台であったドイツの田園都市が対象となろうが、これらの実証的研究は別稿にて行うこととしたい。

謝辞

本研究のケーススタディの執筆にあたっては、西脇市次世代創生課のみなさまをはじめ、多くの市職員の方々の協力を得ました。さらに、重春・野村地区、津万地区、比延地区のみなさま、西脇TMOのみなさま、西脇市総合計画審議会に参加する住民の方々からも多くの教示を受けました。ここに記して感謝申し上げます。

注

- 1) ジーバーツの邦訳の 2006 年版と 2017 年版では、参考文献リストの通り、書籍のタイトルが異なる。本稿では、統一的に『「間にある都市」の思想』との表記することとした。なお、2006 年版を引用した箇所は「ジーバーツ・蓑原 (2006)」、2017 年版を引用した箇所は「ジーバーツ (2017)」として違いが分かるように表記することとした。なお、2006 年版、2017 年版ともジーバーツによる記述の内容はほぼ同一である。
- 2) 西脇市ホームページ「西脇市の概要」を参照 (<http://www.city.nishiwaki.lg.jp>, 2018 年 8 月 14 日確認)。
- 3) 西脇市「平成 30 年度毎月人口集計表」を参照 (<http://www.city.nishiwaki.lg.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/10/300801jinkousyuukeihyou.pdf>, 平成 30 年 8 月 1 日現在。西脇市の住民基本台帳)。
- 4) 西脇市『西脇市都市計画マスタープラン』を参照 (<http://www.city.nishiwaki.lg.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/20/toshi-mas-plan01.pdf>, 2018 年 8 月 14 日確認)。
- 5) 西脇市「市の最上位計画・総合計画」を参照 (http://www.city.nishiwaki.lg.jp/kakukanogoannai/toshikeieibu/jisedaisouseika/sougou_keikaku/index.html, 2018 年 8 月 14 日確認)。また、「田園協奏都市」の都市像に込められている意味については、http://www.city.nishiwaki.lg.jp/kankotokusan/nishiwaki_shoukai/1363304702153.html に簡潔に記されている (2018 年 8 月 14 日確認)。

- 6) 「西脇ファッション都市構想」ホームページを参照 (<https://nishiwaki-fashion.com>, 2018 年 8 月 14 日確認)。
- 7) 前掲注 2)。
- 8) 2018 年 8 月 31 日に西脇市より資料提供を受け、使用許可を受けた。本節の記述は、基本的に当該資料と筆者 (杉山) による観察結果に基づいている。
- 9) 前掲注 6) および西脇市「西脇ファッション都市構想」ホームページ内にある各公表資料を参照 (<http://www.city.nishiwaki.lg.jp/kankotokusan/jibasangyo/bansyuori/1495783582203.html>, 2018 年 8 月 14 日確認)。なお、補完的に西脇市都市経営部次世代創生課からのヒアリング結果にも基づく。
- 10) 本節の記述については、西脇市「新庁舎建設室」ホームページ内の各種公表資料を参照している (<http://www.city.nishiwaki.lg.jp/shiseijyoho/shintyousyakensetsu/shintyousya.html>, 2018 年 8 月 14 日確認)。
- 11) 前掲注 10) にある「まちなか (中心市街地) 活性化の取り組み」を参照。
- 12) 本節は、「西脇市茜が丘複合施設 Miraie」ホームページ (<http://www.city.nishiwaki.lg.jp/miraie/>, 2018 年 8 月 14 日確認) および西脇市都市経営部次世代創生課からのヒアリング結果に基づき記述。
- 13) 西脇市「平成 30 年度高齢化率 (町別)」を参照 (<http://www.city.nishiwaki.lg.jp/kakukanogoannai/soumubu/soumuka/toukeijyoho/koreikaritsu/1523255593926.html>, 2018 年 8 月 1 日現在。西脇市の住民基本台帳)。
- 14) 津万地区については 2016 年 11 月 21 日に現地において、西脇市都市経営部次世代創生課からヒアリング。比延地区については 2017 年 9 月 21 日に現地において、同課および「ええまち比也野里」よりヒアリング。
- 15) 前掲注 3)。
- 16) 前掲注 3)。
- 17) 以上のケーススタディの部分については、事実と誤りがないか西脇市都市経営部次世代創生課に記述に関する確認を行った (2018 年 9 月 3 日最終確認)。

参考文献

- ・姥浦道生・瀬田史彦「ドイツにおける水平的機能分担型広域連携に関する研究」『都市計画論文集』46(1) 日本都市計画学会 2011, pp.99-107
- ・大国正美編『兵庫県謎解き散歩』新人物往来社 (2011)

- ・大島葉月「近代イギリス田園都市運動の展開—ロンドンの田園都市と田園郊外」『藝術研究』23 広島芸術学会 2010, pp.47-57
- ・オズボーン, F.J. 「序文」ハワード, E. 著, 山形浩生訳『明日の田園都市』鹿島出版会 (2016) pp.7-37
- ・オルデンバーグ, R. 著, 忠平美幸訳『サードプレイス—コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』みすず書房 (2013)
- ・金子精次編『地場産業の研究—播州織の歴史と現状』法律文化社 (1982)
- ・久保雅寛「書評 都市田園計画の展望「間にある都市」の思想」トマス・ジーバーツ著『新都市』61(1)都市計画協会 2007, pp.113-115
- ・佐伯啓思『経済成長主義への訣別』新潮社 (2017)
- ・佐々木葉『「間にある都市」の思想』の景観デザインへ』『景観・デザイン研究講演集』2 土木学会 2006, pp.185-191
- ・ジーバーツ, T. 著, 蓑原敬監訳『都市田園計画の展望—「間にある都市」の思想』学芸出版社 (2006)
- ・ジーバーツ, T. 著, 蓑原敬監訳『「間にある都市」の思想—拡散する生活域のデザイン』水曜社 (2017)
- ・シュムペーター, J.A. 著, 中山伊知郎・東畑精一訳『資本主義・社会主義・民主主義』東洋経済新報社 (1995)
- ・杉山武志・松田千尋「コミュニティ概念の本質をめぐる地理学的序説—「まちづくり」との差異に着目しながら」『兵庫県立大学環境人間学部研究報告』20 兵庫県立大学 2018, pp.29-39
- ・祖田修『都市と農村』農林統計協会 (2016)
- ・瀧谷善一・藤井茂「我國綿織物工業の輸出伸張力 (其一)—特に遠州織と播州織に就いて」『国民経済雑誌』68(2)神戸大学経済経営学会 1940, pp.49-83
- ・竹内裕一「播州綿織物業地域における社会的分業の進展と農業的基盤」『経済地理学年報』29(1)経済地理学会 1983, pp.13-83
- ・辻田素子「播州織産地」『地域開発』441 日本地域開発センター2001, pp.34-38
- ・内務省地方局有志『田園都市と日本人』講談社 (1980)
- ・西山八重子『イギリス田園都市の社会学』ミネルヴァ書房 (2002)
- ・ハワード, E. 著, 山形浩生訳『明日の田園都市』鹿島出版会 (2016)
- ・日端康雄『都市計画の世界史』講談社 (2008)
- ・マッシー, D. 著, 森正人・伊澤高志訳『空間のために』月曜社 (2014)
- ・マンフォード, L. 「田園都市の発想と現代都市計画」
ハワード, E. 著, 山形浩生訳『明日の田園都市』鹿島出版会 (2016) pp.40-60
- ・蓑原敬「反転した郊外 新しい人間生活圏像を求めて」『土地総合研究』21(4)土地総合研究所 2013, pp.8-14
- ・村上曉信「飯沼一省の『田園都市論』解釈に関する研究」『農村計画学会誌』19 農村計画学会 2000, pp.193-198
- ・村山顕人『「コンパクトシティ」と『間にある都市』』『建築雑誌』127(1632)日本建築学会 2012, p.45
- ・森川洋「人口減少時代の地域政策」『経済地理学年報』61(3)経済地理学会 2015, pp.202-218
- ・森川洋「人口減少への転換期における日本の中小都市」『地理科学』71(1)地理科学学会 2016, pp.1-18
- ・矢作弘『縮小都市の挑戦』岩波書店 (2014)
- ・山形浩生「訳者あとがき」ハワード, E., 著, 山形浩生訳『明日の田園都市』鹿島出版会 (2016) pp.261-288
- ・山崎亮『コミュニティデザインの源流—イギリス篇』太田出版 (2016)
- ・レルフ, E. 著, 高野岳彦・阿部隆・石山美也子訳『場所の現象学—没場所性を越えて』筑摩書房 (1999)
- ・Hesse, M., Mitten am Rand:Vorstadt, Suburbia, Zwischenstadt, In: *Kommune 5/2004*, 2004, pp. 70-74
- ・Sieverts, T., Sieben einfache Zugänge zum Begreifen und zum Umgang mit der Zwischenstadt, In: *Norbert Gestrung et.al. (Hrsg.), StadtRegion 2003*, Leske + Budrich, - Opladen, 2004, S.43-60
- ・Vicenzotti, V., Thomas S., Zwischenstadt, In: *Eckardt, F. (hrsg.), Schlüsselwerke der Stadtforschung*, Springer, Berlin, 2017, pp.127-143

(平成30年9月20日受付)